

世界は言葉でつながっている

翻訳現場の最前線

2015.11.9

静岡県図書館大会 第3分科会
阿部賢一（立教大学）

1：翻訳家が生まれるまで

- 『外国語上達法』
- カレル・チャペックの居場所
- パリの翻訳工房

2：チェコ語を訳すこと

- チェコ語：インド・ヨーロッパ語族 スラヴ語派 西スラヴ語群
- 『池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集』（河出書房新社）の3つのチェコ作品
- ピーター・シス（ペトル・シス）『かべ』

3：チェコ語のかべ／日本語の壁

- 「夕鶴」は男性名詞、女性名詞？
- すきずき／ちくちく／しくしく
- 「水のようなビール」の意味

4：翻訳を通して見えてくるもの

- 「島でしばらく時間を過ごしているうちに、島の文法および文法が作り出した現実が自然なものに思えてくるのは不思議でたまらなかった。これは、島で罹患し、今なお感染している病のひとつで、完治を望むのは無理だろう。チェコ語の文章を耳にしていると、自分が理解できるよう、島の言語に翻訳しなければという意識に襲われることがある。チェコ語、ひいては、ヨーロッパのすべての言語は、現実についてわずかなことしか語っていない一方で、余計なことまで語っているんじゃないかと思うようになった。たとえば、《právě přicházejí》（かれらはこちらにやってくるところだ）という文章を誰かが発する。すると、人称のことなど関心はないし、しばらくすればすぐわかることなのに、やってくる人の人数が複数であることを動詞の語尾が示していることに、不満をおぼえながら、疑問をいだいてしまう。（…）こういう具合で、チェコ語と島の言語が私の頭のなかでいっしょになり、チェコ語がもっている七つの格のあいだに、取っても取っても生えてくるしつこい雑草のように島の格が生えてきて、ひとりでいるときなど、チェコの人にも、島の人にも、わからない妙な言葉を考えてしまうほどだった」[ミハル・アイヴァス『黄金時代』拙訳、河出書房新社、2014年、61-62頁]。